



雪が降りました。「帽子に手袋、完璧ですね。」と声をかけると「おうちの方が用意してくれました。」という返事。ありがたいです。

手袋は防寒だけでなく転んだ時に手を守ってくれます。

講演会・地区懇談会へのご参加 ありがとうございました ～講演会に参加して下さった方、118名～

1月27日(日)も家庭教育講演会では、元釜石東中学校の齋藤真先生(現岩手県教育委員会中部教育事務所)のお話をお聞きしました。昨年度「3.11集会」でお願いした先生ですが、お話を聞いてみたいという地域の方々の声をいただいて実現したものです。

齋藤先生は、津波から子ども達と一緒に避難したご経験をお持ちです。中学生だけではなく、隣の鶴住居小学校の小学生も連れて避難しました。

中学生が小学生の手をとって、自分も心配なのを我慢して「大丈夫だよ」「がんばろう」とまるで自分にかけてほしいと思われるような言葉を小学生にかけて避難したのでした。



ポテトチップス

離れた学校の校舎を借りての避難所生活。中学生が壁にくっついてお腹を押さえて丸くうずくまっています。お腹がなれば、お腹がすいたことだけ考えてしまうからだと言います。何日も食べない生活が続く中、教室に1つ配られたポテトチップスの袋。

「俺たちはいいです。お年寄りの人たちにあげてください。」と話す中学生に「お年寄りの分はあるよ。これはみんなの分だよ。」と告げると、安心して代表の子が、一人一人の前に1枚ずつ置いていきます。皿も紙も何もなく、ただ床の上にそっと置かれた1枚にポテトチップスを大事に食べたのでした。

「すみません」ではなく

「ありがとうございます」と言おう

そんな間借り生活をしているなか、先生は、子ども達が口癖のように「すみません。」という言葉を出しているのに気がつきます。「君たちは何も悪いことをしていない。「すみません」ではなく「ありがとうございます」と言うことにしよう。」と語りかけます。

『すみません』どころか、中学生は避難所に帰ってきては、一緒に暮らすお年よりの肩もみや小学生の話し相手になってあげていました。

先生に“耳”を向ける子ども達

避難所の学校とは別の学校の特別教室を間借りして授業が再開されました。ホワイトボードをつないで黒板代わりにして授業が行われました。工事のトラックも出入りして騒々しい中での学習で子ども達が落ち着かないかと思えば逆で、子ども達は先生の方に顔ではなく耳を向けて聞きます。それだけ先生の声が聞こえない中での学習でした。「今、先生はなんて言ったっけ?」と子ども達同士で教え合っていて聞いていたのでした。

想像してみてください。

「子どもの数だけ・家族の数だけ、
 悲しみがあります」

自分は助かったけれども親を失った子がいます。子を失った親もいます。親を失った子どもに何とも声をかけてあげられなかったというお話、卒業した子のおうちの方が相談に来られたお話、…。齋藤先生は、「子どもの数だけ、家族の数だけ悲しみがある」とおっしゃいます。「そのほんの一部かもしれませんが」とおっしゃりながら、先生(学校)が、子ども達やご家族に寄り添ってこられたことをお話していただきました。

「やるよな！みんな！」「はい！」

子ども達は、街の合唱コンサートに参加することを決めます。その中で歌うは、「地球星歌」。途中にある「誰にでも愛する人がいる。誰の心にも大切な場所がある。」という歌詞のところでは中学生たちの頬に涙が流れます。嗚咽（おえつ）しながらしゃがみ込む子ども。何度練習してもそこで歌えなくなる子ども達に先生は「練習をやめよう。」と話します。そこにステージから駆け下りてきて「いえ、先生、やらせてください。やるよな！みんな！歌うようなみんな！」と言う生徒会長。その言葉に「はい！」と返事をしてまた練習を始める子ども達。そんな練習を繰り返しての合唱を聞かせていただきました。

「地球星歌」
笑顔のために

この青空はきつと続いている
遠い街で誰かが 見上げる星空に
あなたの夢はきつと続いている
遠い国の野原で 輝く虹に

※あなたの毎日が 世界を創り
愛する想いが 地球へと広がる
私は祈る 明日のために
まだ見ぬ あなたの笑顔のために

あなたがひとり 見上げる月を
遠い海のクジラが 見つめ返している
もしも夜空に 鏡があれば
地球のみんなの 顔が見えるだろう
※ 繰り返し

この小さな手でできること
見えない糸をたどって 全てを感じることに
そう 誰にでも愛する人がいる
誰の心にも 大切な場所がある
さあ その気持ちを無限に広げて
この星を全部 ふるさとと言おう
※ 繰り返し、
いつの日か出会う その日のために

途中、齋藤先生は、何度も声をつまらせながらお話しくださしました。講演のあとで、「地域の方々が、洋野の被災のことを思い出されたのか、それとも、子どもさんやお孫さんと重なり合わせてお聞きになったのか、涙を流されているのが見えたら、こちらも涙が出てしまいました。被災地である洋野町の方に、私がお話するのは失礼ではないかと思ってきましたが、じっと聞いてくださいました。」とお話されていました。

お話をお聞きして、「これから、私たちにできることは？」と考えました。直接被災地の支援を行うこともあるでしょう。震災の被災地だけでなく、台風などの自然災害が起きるたびに支援のことを考えることも、悲しい震災を教訓にして、「みんなで助け合うという気持ちを広める」ということになるのではないかと考えました。また、「今の当たり前前の生活がどれほどありがたいことか」を思うことや、無駄遣いをしないことなどの「やらなければならないことや当たり前前をしっかりとやること」も、震災で被災した方々へ思いを寄せることになるのではないかと考えました。

講演会を実現させるために、洋野町教育委員会や洋野町教育振興会に全面的なご支援をいただき、PTAや地域の方々に加えて消防団、婦人消防協力隊、自治防災組織などの防災関係団体のたくさんのご参加をいただきました。大変、ありがとうございました。

地区懇談会では その1

講演会に続いて行われた地区懇談会では、学校や子ども達の生活についてお伝えし、PTAや地域の方から感想をいただきました。主なものをご紹介します（詳しくは、懇談会後に資料を全家庭にお配りしましたのでご覧ください）。

<学習について>

「かがやきタイム」の取り組みとして、これまで取り組んできた「音読・視写」に加えて今年度は、古典や詩などの群読・暗唱にも取り組み、教科書での学習だけでなく「豊かな学び」をめざして取り組んでいることをご紹介します。また、洋野町独自の教科である「海洋科」のご紹介や複数の教員や支援員が入ったの指導や学級を分けての指導など「複数での指導体制を組んでの指導」やタブレットを使用しての学習についてもご紹介しました。

<体力について>

「靴ひもが結べない」、「姿勢保持が難しい（姿勢がくずれる）」などの最近の子ども様子や、反復横跳びが高学年になるに従って全国平均より低くなる種小の傾向をお知らせしました。家庭では、「一緒に運動をする機会を増やす」だけでなく「スポーツの話をする機会を増やすだけで子どもの運動量が増える」という資料もお知らせしました。